

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

悲華経 の梵蔵漢資料 補遺

著者	石上 和敬
雑誌名	武蔵野大学仏教文化研究所紀要
号	30
ページ	1-21
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000325/

〈悲華經〉の梵蔵漢資料 補遺

Sanskrit, Tibetan and Chinese Texts of the *Karuṇāpundarīka Sūtra*:
A Supplement to IWAGAMI [2009]

石 上 和 敬
IWAGAMI Kazunori

〈キーワード〉 悲華經、大乘悲分陀利經、古写經、写本

0. はじめに

本稿は、〈悲華經〉の梵蔵漢資料に関わる諸情報を収集・整理した石上和敬 [2009] の発表後、新たに収集・整理した関連情報を補遺としてまとめたものである。本稿に収載した諸情報のなかには、すでに石上和敬 [2010a]、石上和敬 [2010b] において断片的に紹介した諸情報も含まれるが¹、本稿を石上和敬 [2009] の補遺と位置づけ、それらの情報も重ねて著録した。また、本稿は、前稿ではほとんど触れることのできなかった日本国内の古写經に関する情報を積極的に収集した²。これは、国内に伝存する古写經の重要性が、その底本の問題等を含めて、近年、大いに注目されつつあることを意識したものである³。

なお、各情報の表記方法等については石上和敬 [2009] に倣うことにし、煩を避けるため、【凡例】等は割愛した。

1.1. サンスクリット本

1.1.1. 写本

〔バングラデシュ〕

(19) Varendra Research Museum, Rajshahi

No. 717. (Siddhanta [1979])*

紙、葉番号 1b-66b、12 行

サイズ：38 × 11 cm*

日付：Samvat 775 (= 1654/55 A.D.)*

特記：*を付した上記情報は、若原雄昭 [2011: 9] に拠る⁴。なお、第 1 葉表面には、Karūṇāpuṇḍarīkatantrāvatāra と経題が記されている。本写本は、書写年が確認できる〈悲華經〉の梵語写本としては最古のものになる。

1.2. チベット語訳諸本

1.2.2. 写本

蔵 A. タボ写本

No. 1.4.0.57 (Running No. 265) Harrison [2009: 159]

Folio No. kha 200, 9 lines.

特記：本写本は 1 葉（表裏）のみで、その範囲は、北京版（蔵 P）で（Cu 309a6-310b2）に相当し、梵本では、およそ（KP,355,10-358,2）に対応する。本写本は第二次釐定以前の旧綴字の特徴を残している⁵。（たとえば、pha rold tu phyind pa (kha 200a2) などに見られる da drag の保持や、mi を myi (kha 200b8) と表記するなどの ya btags の保持など）。また、正書法において、有冠字 s 等が基字の真上ではなく、左側に表記されるという特徴も見られる（Tauscher [2008: xxxvii] では、この特徴を “horizontal” form と呼んでいる）⁶。

蔵 G. ゴンドウラ写本

No. Vol. 22-2 Tauscher [2008: 55]

Location: Ka-Na 60a1-Ka-Ņa 4a1, 10 lines.

特記：本写本も、第二次釐定以前の旧綴字や，“horizontal” form が見られるなど、タボ写本（蔵A）と同様の特徴を有している⁷。また、現時点で未解読であるが、ウメ書体で書かれた1葉（Ka-Ma 50b）分の注記のようなものが存在する⁸。なお、本写本冒頭のインド語原語の音写は、a rya ka ru ni pun da ri ka na ma ma ha ya na su tra となっている⁹。また、本写本末尾の翻訳者には、Surendrabodhi と Ye še sde のみを挙げる。

蔵M. ウランバートル写本

No. 93 Samten [2012: 38]

Location: mdo sde, űa 1b1-216b2, 8 lines

特記¹⁰：本写本は、ウランバートルにあるモンゴル国立図書館所蔵のチベット大蔵経ギャンツェ・テンパンマ・カンギュル写本に含まれるもので、Digital Preservation Society (http://www.tibet-dps.org/index_j.htm) によってデジタル化されている¹¹。なお、本写本では蔵訳者名が Jinamitra, Śīlendrabodhi, Prajñāvarma, Ye še sde となっているが、二人目の Śīlendrabodhi については、他に Surendrabodhi となっている諸本もあり、二系統に分かれている¹²。本写本と同じく Śīlendrabodhi を取るのは、いずれもテンパンマ系とされるトックパレス写本、東洋文庫写本、ロンドン・シェルカル写本の3本であり、訳者名に関する限り、本写本もこれらの系統と一致することになる。

（ムスタン・カンギュル）

No. 595 (mdo sil bu pa, BA PA LA (vol. 15)) Eimer [1999: 106]

特記：ムスタン・カンギュルは、カタログによって知られるのみで、現時点では写本等は発見されていない。したがって、本情報は現物の所在情報ではなく、あくまで、ムスタン・カンギュルのカタログに〈悲華經〉が含まれることを提示するのみである。タイトルは、sñiñ rje pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen po'i mdo とある。なお、本情報は、

Herrmann-Pfandt [2008: 44] に導かれたものである。

(関連資料)

〈悲華經〉の藏訳本文ではないが、〈悲華經〉の内容を要約した藏文資料がチベットで発見されている。次の通り。

Tropper [2005: 53-54 & 60-61] は、チベット中南部の都市ギャンツェ (Gyantse) の僧院ペルコル・チェデー (dpal 'khor chos sde) にある有名な仏塔クンブム (sku 'bum) の内部に、〈悲華經〉の内容を要約したチベット語銘文が2点ほど見られることを紹介している。同書からはチベット銘文自体の全容は知られないが、Ricca & Lo Bue [1993: 209] に銘文の一部を判読できる写真が掲載されている。

1.3. 漢訳諸本

1.3.1. 曇無讖訳『悲華經』十卷

1.3.1.1. 藏経本

悲K. 高麗版大藏経

前稿(石上和敬 [2009: 19])で紹介した再雕本(1251年完成)の他に、韓国ソウルのソナム(誠庵)古書博物館(Sung Am Archives of Classical Literature)に、初雕本(1087年完成)の曇無讖訳『悲華經』卷十のはほぼ全文(T3,227c,25-233c,8)が現存している。この初雕本については、現存部分のデジタル画像を韓国の高麗大藏経研究所(The Research Institute of Tripitaka Koreana(略称: RITK))のウェブサイト(http://kb.sutra.re.kr/ritk_eng/index.do)から閲覧できる。同サイトでは、初雕本と再雕本とのテキストを比較対照できるようになっており、便利である。この他、『高麗大藏経 初刻本輯刊』(域外漢籍珍本文庫)第九冊(西南師範大学出版社・人民出版社, 2012) 470-495に影印が掲載されている。

1.3.1.3. 敦煌写本

前稿(石上和敬 [2009: 22-24])の時点で把握できていなかった敦煌写本として、その後、以下のものを確認した。

悲D 1 0. 敦煌市博物館所蔵 No. 敦博 016

「悲華經 卷第三 大施品第三之二」の一部 (T3,182c,12-183a,02)

本写本については、『甘肅藏敦煌文献』第六卷 (甘肅人民出版社, 1999) : 27 に影印が掲載されている。(上記カタログ番号も同書のもの)

悲D 1 1. 天津市芸術博物館所蔵 No. 津芸 045 (77-5-2304)

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品 第四之三」の一部 (T3,200a,05-16)

本写本については、『天津市芸術博物館蔵 敦煌文献』① (上海古籍出版社, 1996) : 290 に影印が掲載されている。(上記カタログ番号も同書のもの)

悲D 1 2. 天津市芸術博物館所蔵 No. 津芸 054 (77-5-2313)

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品 第四之三」の一部 (T3,200a,17-b,28)

本写本については、『天津市芸術博物館蔵 敦煌文献』① (上海古籍出版社, 1996) : 299 に影印が掲載されている。本写本は悲D 1 1 に続くものと思われる。(上記カタログ番号も同書のもの)

悲D 1 3. 敦煌研究院所蔵 No. 敦研 049

「悲華經 卷第九 檀波羅蜜品 第五之二」の一部 (T3,222a,25-b,18)

本写本については、『甘肅藏敦煌文献』第一卷 (甘肅人民出版社, 1999) : 55 に影印が掲載されている¹³。(上記カタログ番号も同書のもの)

悲D 1 4. 敦煌研究院所蔵 No. 敦研 188

「悲華經 卷第四 諸菩薩本授記品 第四之二」の一部 (T3,188c,12-26)

本写本については、『甘肅藏敦煌文献』第一卷 (甘肅人民出版社, 1999) : 195 に影印が掲載されている。(上記カタログ番号も同書のもの)

1.3.1.5. 日本古写経

日本国内の古写経のなかに現存する曇無讖訳『悲華經』の情報を示す。

なお、目録等に各巻の「首欠」「尾欠」等の情報が示されている場合も、現物未見の古写経については基本的に割愛した。この点、失訳『大乘悲分陀利経』についても同じ。

悲金：金剛寺一切経

大阪府河内長野市の天野山金剛寺蔵の「金剛寺一切経」¹⁴（平安末期から鎌倉時代後期にかけて断続的に書写）に二種類の曇無讖訳『悲華経』の写本が現存する。二種類を便宜上、甲本と乙本と名づければ、甲本は巻九以外の九巻、乙本は巻一と巻三以外の八巻が現存する¹⁵。

文献番号「貞157」（「金剛寺一切経目録」（落合俊典 [2007: 146-147 & 603]））

整理番号 甲本 0157-001a ～ 008a; 0157-010a

整理番号 乙本 0157-002b; 0157-004b ～ 010b

本写本については、国際仏教学大学院大学図書館の「日本古写経データベース」において全画像の閲覧等が可能になっている（ウェブサイト上では一部のみの閲覧）¹⁶。

悲七：七寺一切経

名古屋市の七寺蔵の国指定重要文化財（以下「重文」）「七寺一切経」（1175-78に書写¹⁷）に曇無讖訳『悲華経』全十巻のうち、巻五を除く九巻が現存する。（現物未見）

「甲第五函」（「七寺一切経現存目録」（七寺一切経保存会 [1968: 35]））

『悲華経』を収める「甲第五函」の書写・校合年代は、安元2年11月12日（1176年）～治承元年10月16日（1177年）となっている。また、奥書に「筆師 伊奈波五郎」等の記名が見える¹⁸。

〈七寺一切経関連情報〉

上記の『悲華経』写経の他に、「七寺一切経」に『佛説本行六波羅

蜜経』一卷が含まれている。この經典は、曇無讖訳『悲華経』の一部(T3,174a,9-174b,21)をそのまま別出した短経である。本経名は中国の諸経録にも言及されるものの、実物は知られていない幻の經典であった。中国で欠本となる前に日本に将来され、何回かの書写を経て七寺の蔵経となったと推測することもできるという。本稿においては、『悲華経』の一部をそのまま別出した經典が七寺一切経に現存する、という観点から、ここに紹介することとした。なお、本経の影印と翻刻、並びに、榎本文雄博士による解説が牧田諦亮[1999: 541-554]に収載されている¹⁹。

悲石：石山寺一切経

滋賀県大津市の石山寺蔵の重文「石山寺一切経」に曇無讖訳『悲華経』全十巻が現存する。(現物未見)

「第二十三函—30～39」(石山寺文化財総合調査団[1978: 187-188])

石山寺一切経は念西が1148年に発願したとされている。『悲華経』全十巻については奥書等に書写年代の記載はないが、目録では「院政期写」と推測されている²⁰。

悲興：興聖寺一切経

京都市の興聖寺蔵の「興聖寺一切経」に曇無讖訳『悲華経』全十巻が現存する。(現物未見)

通番 1448～1457 箱番号 千字文 144方 (京都府教育委員会[1998: 97-98])

この興聖寺一切経は、もとは丹波国桑田郡小川郷の西楽寺で書写された一切経(1163-1169に書写)で、その後、南山城の海住山寺を経て、慶長年間に興聖寺に伝わったものとされる²¹。なお、巻十の奥書には、「元仁二年二月一日依民部卿入道殿 御勸進悲華経一部書写進了、従四位下前但馬守源朝臣家長」²²とあり、西暦1225年の書写とされる。この奥書の情報等から判断すれば、『悲華経』写本はもともとの西楽寺一切経には欠けていたが、元仁2年に海住山寺で営まれる解脱房貞慶の13回忌のために補

写が企画され（『悲華經』以外にも補写されたものは存在する）、法要のわずか二日前に補写が完了したことになる。奥書にある「民部卿入道」とは藤原長房のことで、後鳥羽上皇の近臣として貞慶や明恵に帰依した人物であり、書写をした源家長も後鳥羽上皇の近臣である。長房が『悲華經』のみを勧進したのは、当時の『悲華經』、並びにそれに基づく釈迦信仰を考える上でも注目すべき事実である。なお、『悲華經』書写の底本は宋版大藏經の東禪寺版であることが、東禪寺版の刊記までも写した巻が存在することから明らかとされる²³。

悲西：西方寺一切經

大和郡山市の西方寺に伝わる「西方寺一切經」に、曇無讖訳『悲華經』全十巻のうち、巻三～巻七の五巻が現存する。（現物未見）

整理番号 465-469 （大和郡山市教育委員会 [1984: 171-172]）

なお、巻三、巻四、巻五、巻七には次の奥書がある。（大和郡山市教育委員会 [1984: 57]）

巻三 （別筆）一交了 / （同筆）大願主僧聖西執筆僧永海書了

巻四 （別筆1）一交了 / （別筆2）修理願主僧聖西為法界衆生平等利益也

巻五 （別筆）一交了

巻七 （別筆）一交了 / （同筆）願主聖西為法界衆生成仏得道故也

西方寺一切經とは、摂津国の観音大門寺一切經が元文3年（1738年）に信者たちの寄進によって西方寺に購入されたものである。同一切經の『悲華經』各巻の書写年代は「平安期」とされる。

悲新：新宮寺一切經

宮城県名取市の熊野新宮寺の重文「新宮寺一切經」に、曇無讖訳『悲華經』全十巻のうちの、巻四、巻九、巻十の三巻が現存する。（現物未見）

整理番号 479～481 （東北歴史資料館 [1980: 62]）

書写年代は「鎌倉中期」とされる²⁴。

悲松：松尾社一切経

京都市上京区の妙蓮寺蔵の重文「松尾社一切経」に、曇無讖訳『悲華経』全十巻のうち、巻二と巻三を除く八巻が現存する。（現物未見）

整理番号 1234 ～ 1241 （中尾堯 [1997: 478-481]）

松尾社一切経とは、もともとは松尾社（松尾大社）に納められたものだが、安政4年（1857年）に嶋田弥三郎の寄進によって妙蓮寺に移された平安時代後期書写の一切経である²⁵。『悲華経』各巻の奥書にはいずれも「永久四年六月」（西暦1116年）に書写が完成したことが記されている²⁶。

悲法：法隆寺一切経

奈良県斑鳩町の法隆寺蔵の重文「法隆寺一切経」に、曇無讖訳『悲華経』全十巻のうち、巻二～巻六、及び、巻十の六巻が現存している。（現物未見）

整理番号 既指定分 130（第六函－八）；131（同函九）；147（同函二十五）～149（同函二十七）、追加指定分 13（文化庁 [1986: 14-15 & 76]）²⁷

書写年代については、各巻とも「平安後（末）」、または、「平安」とある²⁸。

悲色：色定法師一筆一切経

福岡県宗像市の宗像大社保管（興聖寺蔵）の重文「色定法師一筆一切経」に、曇無讖訳『悲華経』全十巻のうち、巻一を除く九巻が現存する。（現物未見）

整理番号 1343（巻二）～1351（巻十）（興聖寺 [1957: 103]）

色定法師一筆一切経とは、宗像大社の色定法師（1158～1242）が約40年をかけて一人で一切経を書写したものである²⁹。巻十の奥書に「建久二年辛亥四月廿六日彦山三所権現以貴水書之一切経一筆書写行人良祐／本綱首張成墨助成綱首李榮筆勤覚成房／自一交畢 他一交畢」とあり、西暦1191年の書写であることがわかる³⁰。その他の巻の奥書には「彦山三所権現以貴水書之」（巻二～巻九まで）とのみある。なお、本一切経の底

本は宋版一切經であることが識語からわかっている。

悲清：金剛峯寺藏中尊寺經（いわゆる清衡經）

奥州藤原氏の藤原清衡の発願による「紺紙金銀字一切經」³¹のうち、現在、高野山金剛峯寺藏の經卷（国宝「金銀字一切經（中尊寺經）」）のなかに、曇無讖訳『悲華經』全十卷が現存する。

調書番号通番 0683-0692（上山春平 [1990: 44]）³²

中尊寺經の書写年代は「永久5年（1117年）から8、9年かかって書写」されたとされる。また、底本については『悲華經』自体については未解明であるが、次の記述は参考になる。「従来より宋版を底本に用いたとされるが、『華嚴經』などは唐代のテキストの系統を引いていることが確認された」（上山春平（赤尾栄慶）[1990: 1 & 3]）。なお、中尊寺經の写真画像を、高野山靈宝館様、及び、京都国立博物館様のご好意により閲覧することができた。記して謝意を表します。

悲秀：中尊寺藏紺紙金字一切經

中尊寺大長寿院藏の国宝「紺紙金字一切經」（いわゆる秀衡經）のなかに、曇無讖訳『悲華經』全十卷が現存する³³。（現物未見）

悲荒：荒川經

高野山金剛峯寺藏の重文「紺紙金字一切經（荒川經）」のなかに、曇無讖訳『悲華經』全十卷が現存するとされる。（現物未見）

「大乘經部方等部」の「11－は」（「荒河經目錄」（水原堯栄 [1981: 94]））

荒川經とは、1156年に崩御した鳥羽法皇の菩提を弔うため、皇后の美福門院が発願した紺紙金字一切經のことである。この一切經は、1159年に高野山の六角經藏に納められ、その永代供養料として紀伊国荒川庄が寄進されたので、これを荒川經と呼んでいる³⁴。

悲叡：西大寺叡尊像納入文書

奈良西大寺蔵の興正菩薩叡尊坐像（1280 年完成）の胎内に納められた諸文書のなかに、曇無讖訳『悲華經』巻六と巻七とが含まれている。巻六と巻七の奥書部分が、奈良国立文化財研究所 [1977: 400-401] に翻刻されており（下記に一部転載）、巻七の巻首と巻末部分の写真が奈良国立博物館 [1991: 28] に掲載されている。両巻の奥書によれば、いずれも 1280 年に書写が完成したとある。

巻六「弘安三年庚辰九月四日於南都西大寺書寫了／菩薩戒弟子比丘生恵（以下略）」

巻七「弘安三年庚辰九月三日未時書寫畢／（中略）／執筆小■■■正円（以下略）」

1.3.2. 失訳『大乘悲分陀利經』八巻

1.3.2.1. 蔵経本

大K. 高麗版大蔵経

本経についても、前稿（石上和敬 [2009: 19]）で紹介した再雕本（1251 年完成）の他に、初雕本（1087 年完成）の一部が現存していることが明らかになった。京都の南禅寺に失訳『大乘悲分陀利經』巻五のほぼ全文（T3,264b,4-271a,2）³⁵ が現存しており、現存部分のデジタル画像を韓国の高麗大蔵経研究所（The Research Institute of Tripitaka Koreana（略称：RITK））のウェブサイト（http://kb.sutra.re.kr/ritk_eng/index.do）から閲覧できる。この他、『高麗大蔵経 初刻本輯刊』（域外漢籍珍本文庫）第九冊（西南師範大学出版社・人民出版社，2012）439-469 に影印が掲載されている。

1.3.2.5. 日本古写経

大S S. 正倉院聖語蔵

前稿（石上和敬 [2009: 28]）で紹介した天平 12 年御願経に含まれる『大乘悲分陀利經』巻三の他に、宮内庁正倉院事務所蔵聖語蔵経巻の

「神護景雲二年御願經」(762-770 に書写) にも『大乘悲分陀利經』卷三と卷四が含まれている³⁶。この二巻については巻末に願文が付されているが、「神護景雲二年御願經」全 740 巻のうち、巻末に願文が付されているのはこの二巻を含めて全体でも四巻しかないという点でも、この二巻は注目されている³⁷。同經のデジタル画像はカラー CD-ROM 版「宮内庁正倉院事務所所蔵聖語藏經巻」第 3 期 神護景雲二年御願經 1 (東京: 丸善, 2007) で確認できる。

大金: 金剛寺一切經

「金剛寺一切經」(概要は「悲金」の項参照) のなかに、失訳『大乘悲分陀利經』全八巻のうち、巻三と巻五を除く六巻が現存する。

文献番号「貞 156」(「金剛寺一切經目録」(落合俊典 [2007: 146 & 603]))

整理番号 0156-001; 0156-002; 0156-004; 0156-006 ~ 008

本写本についても、国際仏教学大学院大学図書館の「日本古写經データベース」からデジタル画像で閲覧できる。

大七: 七寺一切經

「七寺一切經」(概要は「悲七」の項参照) に失訳『大乘悲分陀利經』全八巻のうち、巻五と巻六を除く六巻が現存する。(現物未見)

「甲第五函」(「七寺一切經現存目録」(七寺一切經保存会 [1968: 35]))

『大乘悲分陀利經』を収める「甲第五函」の書写・校合年代は、安元 2 年 11 月 12 日 (1176 年) ~ 治承元年 10 月 16 日 (1177 年) となっている³⁸。

大石: 石山寺一切經

「石山寺一切經」(概要は「悲石」の項参照) に失訳『大乘悲分陀利經』全八巻が現存する。(現物未見)

「第二十三函— 40 ~ 47」(目録「石山寺一切經」(石山寺文化財綜合調査団 [1978: 188-189]))

目録によれば、『大乘悲分陀利經』全八巻も「院政期写」となっている。

大興：興聖寺一切經

「興聖寺一切經」(概要は「悲興」の項参照)に失記『大乘悲分陀利經』全八巻が現存する。(現物未見)

通番 1440～1447 箱番号 千字文 143 萬 (京都府教育委員会 [1998: 97])

卷二の奥書には、「永万二年才次丙戌三月廿六日求法沙門珎盛書、一校了、仁西」³⁹とあり、西暦 1166 年の書写であることがわかる。したがって、『大乘悲分陀利經』については、もともとの西楽寺一切經に存していたものと推測される。

大新：新宮寺一切經

「新宮寺一切經」(概要は「悲新」の項参照)に、失記『大乘悲分陀利經』全八巻のうちの、卷一、卷二、卷五の三巻が現存する。(現物未見)

整理番号 476～478 (東北歴史資料館 [1980: 62])

書写年代はいずれも鎌倉中期とされる。

大松：松尾社一切經

「松尾社一切經」(概要は「悲松」の項参照)に、失記『大乘悲分陀利經』全八巻のうち、卷二と卷四を除く六巻が現存する。(現物未見)

整理番号 1228～1233 (中尾堯 [1997: 478-481])

『大乘悲分陀利經』卷八の奥書に「保安三年五月」(西暦 1122 年)に書写が完成したことが記されていることから⁴⁰、各巻とも平安時代後期の書写と考えられている。

大法：法隆寺一切經

「法隆寺一切經」(概要は「悲法」の項参照)に、失記『大乘悲分陀利經』全八巻のうち、卷一を除く七巻が現存している。(現物未見)

整理番号 既指定分 127 (第六函－五) ; 129 (同函七) ; 143 (同函二十一) ～ 146 (同函二十四)、追加指定分 14 (文化庁 [1986: 14-15 & 76])⁴¹

書写年代については、「目録」には各巻とも「平安後 (末)」、または、「平安」とあるが⁴²、巻四、巻七、巻二には次のような奥書があり、巻四は 1115 年、巻二は 1116 年の書写とわかる。

巻四 「永久三年歲次乙未九月三日書写了 / 法隆寺一切經之内上宮王院 / 堂司見円為過去二親往生極 / 樂頓證菩三卷書写如右敬白 / 勸進聖勝賢」

巻七 「若宮三子為息災延命增長福壽書写了」⁴³

巻二 「永久四年二月二日法隆寺一切經之内三卷書了僧覺□ / 為過去慈父□證果□受現在悲母安□ / 先迦善願彼是□ / 丹誠本書写也」⁴⁴

大色：色定法師一筆一切經

「色定法師書写一切經」(概要は「悲色」の項参照)に失記『大乘悲分陀利經』全八巻のうち、巻二と巻五～巻八の五巻が現存する。(現物未見)

整理番号 1338 (巻二)、1339 (巻五) ～ 1342 (巻八) (興聖寺 [1957: 102])

巻八の奥書に「建久二年辛_亥二月廿七日書之」とあり、西暦 1191 年の書写であることがわかる。

大清：金剛峯寺藏中尊寺經 (いわゆる清衡經)

金剛峯寺藏「中尊寺經」(概要は「悲清」の項参照)のうち、現在、高野山金剛峯寺藏の經巻のなかに、失記『大乘悲分陀利經』巻一、巻五、巻七が現存する。

調書番号通番 3869, 3925, 4058 (興善宏 [2005: 49])。

また、同經の巻六は、京都国立博物館にいわゆる守屋コレクションの一部として収蔵されている。この巻六については、京都国立博物館のウェブサイト (<http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/index.html>) で巻六の見返と巻主部分、及び巻末の部分をデジタル画像で閲覧することができる⁴⁵。な

お、同経の巻一と巻七の写真画像を、高野山霊宝館様、及び、京都国立博物館様のご好意により閲覧することができた。記して謝意を表します。

大秀：中尊寺蔵紺紙金字一切経（いわゆる秀衡経）

中尊寺大長寿院蔵の「紺紙金字一切経」（概要は「悲秀」の項参照）のなかに、失記『大乘悲分陀利経』全八巻のうち、巻一が現存している。（現物未見）

大荒：荒川経

「荒川経」（概要は「悲荒」の項参照）のなかに、失記『大乘悲分陀利経』全八巻のうち、巻八を除く七巻が現存するとされる。（現物未見）

「大乘経部方等部」の「12—い」（「荒河経目録」（水原堯栄 [1981: 94]）。

以上。

（2013. 11. 3 稿）

〈謝 辞〉

本稿の文責が筆者一人にあることは言うまでもないが、本稿作成にあたり、その都度、謝辞を掲載させて頂いた方々のほかに、国際仏教学大学院大学の落合俊典教授、及び、国際仏教学大学院大学図書館様には種々御高配を賜わった。ここに記して、あらためて謝意を表させていただきます。

（Endnotes）

- 1 さらに、筆者が2011年に東京大学に提出した学位論文「『悲華経』の研究—釈迦五百誓願を中心として」（未公刊）においても、いくつかの情報を補っているが、それらについても本稿にあらためて掲載した。
- 2 本稿でいう古写経とは、奈良・平安・鎌倉期に書写された写経を指す。古写経の場合、底本の問題が重要であるが、厳密に底本を確定し得ない写経も多いため、本稿では取り敢えず、鎌倉期までに書写されたことが確実な『悲華経』『大乘悲分陀利経』の写経について情報収集した。

- 3 国際仏教学大学院大学で進められた学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」事業や、同大学院大学に置かれた日本古写経研究所などの一連の成果が代表的なものであろう。なお、日本古写経の概要等について、赤尾栄慶 [1994: 145-259]、京都国立博物館 [2004] に大いに教えられた。また、国際仏教学大学院大学 [2006: 62] も基礎情報として利用させて頂いた。
- 4 本写本の写真データに関しては、龍谷大学の若原雄昭教授のご高配を賜わった。記して謝意を表します。
- 5 西田龍雄 [1987: 122-123]、Tauscher [2008: xxxvi-xxxvii]。
- 6 本写本の写真版を、スタンフォード大学のポール・ハリソン教授より頂戴した。記して謝意を表します。
- 7 Tauscher [2008: xxxvi-xxxvii]。
- 8 この他にも、7葉ほどにおいて、ウメ書体による欄外の注記のようなものが見られる。
- 9 本写本の写真版の入手については、ウィーン大学のヘルムート・タウシャー教授のお手を煩わせた。記して謝意を表します。
- 10 なお、石上和敬 [2009: 19] の時点においては、Samten [2012] は未刊であったため、本写本についてはBethlenfalvy [1982: 21] による情報を提示したが、現在では、Samten [2012] の情報にあらためるべきである。
- 11 本写本のデジタルデータについては、唯称寺仏教文化交流研究にご高配を賜わった。記して謝意を表します。
- 12 詳細は、石上和敬 [2009: 15 & 31-32] 参照。
- 13 なお、同書では本写本を「巻第五 諸菩薩本授記品第四之三」とするが、表記のように訂正すべきである。
- 14 金剛寺一切経については、落合俊典 [2004] がまずは参照されるべきである。
- 15 詳細は落合俊典 [2007: 146-147 & 603] を参照されたいが、各巻のなかには、首欠、尾欠の巻も含まれる。特に乙本の巻十は欠落が大きい。
- 16 甲乙両本のデジタル画像からの複写については、国際仏教学大学院大学の落合俊典教授、並びに、現、北海道大学の林寺正俊准教授のご高配を賜わった。記して謝意を表します。また、石上和敬 [2010b] において、曇無讖訳『悲華經』巻七の一部分 (T3.209a.7-210c.1) について、甲乙両本を含め、藏経本や他の写本と比較検討し、甲乙両本の特徴について簡単にまとめた。
- 17 七寺一切経保存会 [1968: 186]。
- 18 七寺一切経保存会 [1968: 202]。
- 19 この他、落合俊典 [1990: 121] も参照。
- 20 石山寺文化財総合調査団 [1978: 187-188 & 885-886]。
- 21 京都府教育委員会 [1998: 417]。
- 22 奈良国立博物館 [2012: 171] に「悲華經 巻第十巻末」部分の写真が掲載されて

- おり、この奥書を確認できる。また、京都府教育委員会 [1998: 334] も参照。
- 23 京都府教育委員会 (西山厚) [1998: 442-443]。また、奈良国立博物館 (西山厚) [2012: 23-24] も参照。
- 24 東北歴史資料館 [1980: 62]。
- 25 中尾堯 [1997: 17]。
- 26 中尾堯 [1997: 239]。また、「願主」は「神主秦宿禰親任」とある。
- 27 「[法隆寺一切経] 現存目録 (稿)」(竺沙雅章 (宮崎健司) [1999: 23]) においても、現存巻数は同じ。整理番号 240 (巻二) ~ 244 (巻六) ; 245 (巻十)。
- 28 文化庁 [1986: 14-15 & 76]。
- 29 同一切経については、『宗像市史 古代・中世・近世』通史編第二巻 (宗像市、1999) 542-555 頁、『宗像郡誌』下巻 (名著出版、1972) 234-314 頁等に詳しい。
- 30 書写年は、興聖寺で編纂された『色定法師一筆書写一切経 書写年号別目録』(慶應義塾大学図書館蔵、発行年不明。Google Fulltext で参照可) でも確認できる。
- 31 広義の中尊寺経は、次の三つに分類されるが、この中尊寺経 (清衡経) は (1) に相当すると考えられる。「(1) 初代清衡 (1056-1128) の発願になる紺紙金銀交書一切経。(2) 三代秀衡 (? -1187) の発願と考えられる紺紙金字一切経。(3) 二代基衡 (生没年不詳) 及び秀衡が各々の亡父の供養のために発願した紺紙金字法華経」(上山春平 (赤尾栄慶) [1990: 1])。
- 32 なお、水原堯栄「秀衡経目録」(水原堯栄 [1981: 15]) の「大乘経方等部」の函号 58 に『悲華経』全十巻が現存するとされるが、この「秀衡経」は、おそらく、前注の三分類の (1) の清衡経のことと思われる。根拠としては、水原堯栄 [1981] の目次に、「秀衡経目録」に続いて「観心寺秀衡経目録」とあること (観心寺には清衡経が現存する) や、高野山が作成した中尊寺経リストのタイトルが『国宝指定 秀衡経収蔵目録 高野山大宝蔵』となっている (興善宏 [2005: 25]) ことなどが挙げられる。
- 33 同一切経は、(注 31) の (2) に相当するもので、中尊寺には 2724 巻現存する (佐々木邦世 [1999: 142-161]、NHK 仙台放送局他 [2008: 227] など参照)。なお、同一切経には公刊された目録等は存在しないため、中尊寺様より直接、ご教示を頂いた (『大乘悲分陀利経』についても同じ)。記して謝意を表します。また、同一切経の底本については、全体にわたる本格的な調査を待たなければならないが、多くは宋版大蔵経を底本とするとされる (佐川美術館 [2004: 31-32])。
- 34 京都国立博物館 [2004: 322]。なお、荒川経は現在、高野山に 3575 巻が現存する。
- 35 初雕本では巻五は (T3,271a,2) で終わっているが、大正蔵では続く「歎品第十八」(T3,271a,3-272b,13) も巻五に含まれている。
- 36 飯田剛彦 [2012: (36)] の一覧表では、巻三と巻四は ID 番号 994 と 995 である。
- 37 この点、詳細は飯田剛彦 [2012: (1)-(3)] を参照。同論文には『大乘悲分陀利経』

卷三の巻首と巻末願文との写真も掲載されている。また、同願文の翻刻が杉本一樹 [1985: (35)] に掲載されている。

- 38 七寺一切経保存会 [1968: 202]。
- 39 京都府教育委員会 [1998: 334]。
- 40 中尾堯 [1997: 238]。また、巻七の奥書には、「源清章為法界衆生書写畢」とある。
- 41 「法隆寺一切経」現存目録（稿）（竺沙雅章（宮崎健司）[1999: 23]）においても、現存巻数は同じ。整理番号 233（巻二）～ 239（巻八）。
- 42 文化庁 [1986: 14-15 & 76]。
- 43 巻四と巻七は文化庁 [1986: 15]。
- 44 文化庁 [1986: 76]。
- 45 また、巻六の見返と巻主部分は、京都国立博物館 [2004: 199 & 321] にもカラー写真で掲載されている。

〈参考文献一覧〉

赤尾栄慶

1994 頼富本宏・赤尾栄慶『写経の観賞基礎知識』（東京：至文堂）

飯田剛彦

2013 「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」『正倉院紀要』34: (1) - (50). 石山寺文化財総合調査団

1978 『石山寺の研究——一切経篇』（京都：法蔵館）

石上和敬

- 2009 「Karunāpuṇḍarīka の梵藏漢資料」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』25: 1-42.
- 2010a 「〈悲華経〉の先行研究概観」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』26: 1-42.
- 2010b 「〈悲華経〉梵藏漢諸本の対照—釈迦五百誓願の一音説法部分について」『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』10: 85-141.

上山春平

- 1990 『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究』（昭和 63 年度・平成元年度科学研究費補助金【総合研究 A】研究成果報告書、研究代表者 上山春平）

N H K 仙台放送局

- 2008 図録『平泉 みちのくの浄土』（仙台：NHK 仙台放送局他）

落合俊典

- 1990 「七寺一切経と古逸経典」『仏教史学研究』33-2: 117-139.
- 2004. 『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』（平成 12 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究（A）・（1）研究成果報告書、研究代表者 落合俊典）。

2007. 『金剛寺一切經の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』（平成 16 年度～ 18 年度科学研究費補助金 基盤研究（A） 研究成果報告書〈第二分冊〉、研究代表者 落合俊典）

京都国立博物館

- 2004 図録『古写經—聖なる文字の世界』（京都：京都国立博物館）

京都府教育委員会

- 1998 『興聖寺一切經調査報告書』京都府古文書調査報告集第十三集（京都：京都府教育委員会）

興聖寺

- 1957 竹内理三編『色定法師一筆書写一切經目録』（宗像市：興聖寺）

興善宏

- 2005 『中尊寺經を中心とした平安時代の装飾經に関する総合的研究』（平成 13・14・15・16 年度科学研究費補助金【基盤研究（A）(2)】研究成果報告書、研究代表者 興善宏）

国際仏教学大学院大学

- 2006 国際仏教学大学院大学 學術フロンティア実行委員会編『日本現存八種一切經対照目録』（東京：国際仏教学大学院大学）

佐川美術館

- 2004 図録『国宝 中尊寺展—奥州藤原氏三代の黄金文化と義經の東下り』（守山市：佐川美術館）

佐々木邦世

- 1999 『平泉中尊寺—金色堂と經の世界』歴史文化ライブラリー（東京：吉川弘文館）

杉本一樹

- 1985 「聖語藏經卷紀年銘集成（一）」『正倉院年報』7: (30)-(42) .

竺沙雅章

- 1999 『法隆寺一切經の基礎的研究—大谷大学所蔵本を中心として』（平成 8～平成 10 年度科学研究費 基盤研究（B）(2) 研究成果報告書、研究代表者 竺沙雅章）

東北歴史資料館

- 1980 『名取新宮寺一切經調査報告書』東北歴史資料館資料Ⅱ（多賀城：東北歴史資料館）

中尾堯

- 1997 本門法華宗大本山妙蓮寺監修・中尾堯編集『京都妙蓮寺藏『松尾社一切經』調査報告書』（東京：大塚巧芸社）

七寺一切經保存会

- 1968 『尾張史料 七寺一切經目録』（名古屋：七寺一切經保存会）

〈悲華經〉の梵藏漢資料 補遺

奈良国立博物館

- 1991 図録『奈良西大寺展』第二版、奈良国立博物館編（奈良：奈良国立博物館）
2012 図録『御遠忌 800 年記念特別展 解説上人貞慶—鎌倉仏教の本流』奈良国立博物館編（奈良：奈良国立博物館）

奈良国立文化財研究所

- 1977 『西大寺叡尊傳記集成』奈良国立文化財研究所監修（京都：法蔵館）

西田龍雄

- 1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』（東京：冬樹社）108-169.

文化庁

- 1986 文化庁文化財保護部美術工芸課編『法隆寺一切経目録』（東京：文化庁）

牧田諦亮

- 1999 牧田監・落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書 第四卷 中国日本撰述經典（其之四）・漢訳經典』（東京：大東出版社）

水原堯栄

- 1981 中川善教編『水原堯栄全集』第四卷（京都：同朋舎出版）

若原雄昭

- 2011 「バングラデシュ国内に保存されるサンスクリット仏教写本、他（BARC ユニット1 第2回バングラデシュ調査報告）」『龍谷大学アジア仏教文化研究センター ワーキングペーパー』No. 11-01.
http://barc.ryukoku.ac.jp/eng/research/upload_file/11-01wakahara.pdf よりダウンロード

Bethlenfalvy, Géza

- 1982 *A Hand-List of the Ulan Bator Manuscript of the Kanjur RGYAL-RTSE THEM SPANŠ-MA* (Budapest: Akademiai Kiado)

Eimer, Helmut

- 1999 *The Early Mustang Kanjur Catalogue*, WSTB 45 (Wien: Universität Wien)

Harrison, Paul

- 2009 *A Catalogue of the Manuscript Collection of Tabo Monastery, vol.I Sūtra Texts*, Tabo Studies III (Roma: ISTITUTO ITALIANO PER L'AFRICA E L'ORIENTE)

Herrmann-Pfandt, Adelheid

- 2008 *Die LHAN KAR MA, Ein früher Katalog der ins Tibetische übersetzten buddhistischen Texte* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften)

Ricca, Franco & Lo Bue, Erberto

- 1993 *The Great Stupa of Gyantse, A Complete Tibetan Pantheon of the Fifteenth Century* (London: Serindia Publications)

Siddhanta, Sachindra Nath

- 1979 *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Varendra Research Museum Library*, Vol. I, (Rajshahi: Varendra Research Museum, University of Rajshahi) (現物未見)

Samten, Jampa

- 2012 Jampa Samten, Hiroaki Niisaku and Kelsang Tahuwa ed., *Catalogue of the Ulan Bator rGyal rtse them spangs ma Manuscript Kangyur* (Tokyo: Yuishoji Buddhist Cultural Exchange Research Institute) PDF version
http://www.yuishoji.org/TempangmaCat_nsc_20120501.pdf よりダウンロード

Tauscher, Helmut

- 2008 *Catalogue of the Gondhla Proto-Kanjur*, WSTB 72 (Wien: Universität Wien)

Tropper, Kurt

- 2005 *Die Jātaka-Inschriften im SKOR LAM CHEN MO des Klosters ZHA LU*, WSTB 63 (Wien: Universität Wien)

(武蔵野大学 教養教育部 准教授)